

令和7年度特色入試問題

《文学部》

「学びの設計書」に関する論述試験

「学びの設計書に関する論述試験及び提出書類」についてA～Cの3段階評価

(注 意)

1. 問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は表紙のほかに3ページある。
3. 解答冊子は表紙のほかに2ページあり、そのうち「ます目」の部分が解答欄である。なお、別に下書き用紙2ページを配付する。
4. 試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。
表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
5. 解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
6. 解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
7. 解答冊子はどのページも切り離してはならない。
8. 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。解答冊子は持ち帰ってはならない。

問 次の文章を読み、筆者が論じている「言語のディレンマ」についてどう考えるか、あなたが学びの設計書に書いたことと関連づけて述べなさい。(800字以内)

哲学はこれまで、どの言語で哲学するか、という問題にほとんど向き合ってきませんでした。「哲学は普遍的な営みだから、どの言語でも変わりはない」という考えが潜在的にあったからだと考えられます。「自然言語には欠陥があり曖昧さや多義性は避けられないのだから、理想的には論理学だけで議論する」、あるいは「普遍言語を作ればよいではないか」、そういう発想もありました。しかし、実際には、どの言語で哲学するかという問題は厳然と存在し、しかも、非常に重要な課題となっています。

「^{フィロソフィー}哲学」と呼ばれる学問分野は、古代ギリシアを起源とし中世から近世にかけて、ヨーロッパの大学で教えられ研究されました。それは、当時の学問共通語であったラテン語で行われていましたが、一七世紀以後には各国語でも著作や論文が公刊されるようになります。デカルトは一六三七年刊の『方法序説』をフランス語で著しましたが、主著『省察』は一六四一年にラテン語で出しました。スピノザはオランダ人でしたが、ごく一部の著作を除いてラテン語で書きました。イギリスではフランシス・ベーコンやホッブズ(一五八八～一六七九)がラテン語と英語の両方で書きましたが、ジョン・ロック(一六三二～一七〇四)はより多くを英語で書いています。著述は読者を意識するものであり、時代ごとに使用言語が変わるのはそうした時代背景に応じたものです。

哲学や人文学がラテン語を中心とした状況は一九世紀にも続きますが、その後はドイツ語やフランス語が優位となり、二〇世紀には英語が一気に主流になりました。現在では哲学でも英語の一元的支配(グローバル化)が進んでいます。

同じ言語でも、時代を越えると翻訳が必要になります。私たち現代の日本人にとって、江戸期以前の日本語をそのまま読むことは困難であり、現代語に訳して説明する必要があります。明治期の文章でもきわめて難解なものが多く、かえって古文の方が分かりやすいと感じる場合もあります。現代語に訳す場合、例えば道元(一二〇〇～一二五三)でも本居宣長(一七三〇～一八〇一)でも、その説明は現代の哲学用語、西洋哲学に由来する概念を用いて整理することになります。それも一種の翻訳です。

多元的な言語状況は混乱や不便さも生んできました。そこで、普遍的な哲学言語は可

能か、という問いも追究されました。あるいは、数式のように論理学は記号だけで遂行できるので、自然言語から独立ではないか、という見方もあります。

また、自然言語の間に、哲学の言語として違いはあるのでしょうか。かつては、「フィロソフィア」発祥の地である古典ギリシア語が特権的に哲学に向けた言語だというイメージが共有され、近代ではドイツ語が厳密な論理的思考に相応しい哲学的言語だという主張もなされました。反対に、日本語は情緒的で曖昧なので、非論理的であって哲学には向かない、といった見方も提出されてきました。しかし、日本語が「非論理的、非哲学的」という見方にはまったく根拠がありません。

哲学を行う営みとそれを遂行する言語は相即不可分です。哲学の言語は文化と伝統が長年培ってきた自然言語からの発展型であり、個別言語との関係をしっかり考慮することなしには豊かな哲学を生み出せません。世界で行われる各哲学は、その言語と文化の歴史の上で初めて独自性を発揮するのです。

しかし、世界哲学は全世界共通の場で対話するにあたり、「言語のディレンマ」を抱えることになります。それは、世界哲学がより多くの、より広い範囲の哲学伝統を対象とすればするほど、かえって言語の多様性が損なわれ、共通語としての英語への依存度が高まる、という構造上の矛盾です。

国際的な哲学研究では、英語での論文執筆や研究発表が前提となっていて、例えば日本語でいくら優れた成果を発表しても、ほぼ無視されてしまいます。ここには学問の世界での影響力の違いもありますが、学会や学術雑誌を主催する場での実践的制約も大きいようです。つまり、マイナーな言語で発表しても聴衆や読者がいないので、結局は英語でないと評価が得られず、本や雑誌も売れないという構造です。

英語一元化はすでに自然科学・技術や経済の分野では進んでいて、「グローバルとは英語を使うことである」かのような神話が確立しています。これには世界中の人に共通の場を提供するというメリットもありますが、反面で多くのデメリットも指摘されています。

例えば、非英語圏で哲学する人たちは、英語的思考とそのアカデミックな枠組みに強制的に加入させられます。自文化や自国語のレトリックや論理を駆使しても、それはほとんど通用しないため、英語の学問世界のスタンダードに合わせざるを得ないのです。そうすると、フランス・パリのソルボンヌ大学やドイツ・ベルリンのフンボルト大学での研究

より、イギリスのケンブリッジ大学やオクスフォード大学、アメリカ合衆国のハーバード大学やプリンストン大学やスタンフォード大学の研究がはるかに高い評価を受けることになります。当然、世界中の研究者や学生が後者の仕組みを学び、その基準に従った研究活動に従事することになるのです。これは、多様性や独自性への重大な侵害であり、豊かな思考を阻害する平板化です。しかも、こういった一元化がドイツやフランスや日本の研究者によって自主的、積極的に進められることが、問題をより深刻にしています。

「言語のディレンマ」が突きつける問題は、より多くの哲学伝統を取り込んで対話しようとすればするほど、英語という共通の場が必要となり、英語の一元的支配、グローバル化が進行するという状況であり、他の諸言語での哲学の衰退です。つまり、多様性追求と一元化のディレンマなのです。世界哲学というプロジェクトはその^{かんせい} 陥穽をできる限り避け、世界哲学の多言語スタイルを生かす場や手段を模索することになります。そんな英語一元性をもたらした政治や経済や文化の状況一般も、今や深刻に反省すべき時期にあります。

他方で、多くの人が用いる共通語としての「英語」について、それが一枚岩でないという指摘もあります。英語といってもイギリス英語とアメリカ英語、さらにオーストラリアやシンガポールの英語ではかなりの違いがあります。また、英語を第二外国語として用いる人々の間でも、オランダ語やドイツ語やフランス語といった隣接言語の話者が英語を用いる場合は、それほど大きなギャップは感じないかもしれませんが、中国語や日本語など別系統の言語、異なる書記体系を用いる言語圏の人々にとっての英語は、また違う意味を持っています。

同じ国際学会で英語をしゃべっていても、それを自国語のように使いこなす人と、完全に他国語として使う人とは大きな違いがあります。英語一元化といっても、その中に複雑な言語事情や力関係が生じている点も見逃せません。また、英語が単一には扱えないと指摘しても、英語一極化という問題が解消するわけではありません。

(納富信留『世界哲学のすすめ』(ちくま新書、2024年)より。一部省略)